



あの日のあの川 リレー日記 ～第2話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第2話主人公 中前 千佳

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：埼玉県芝川)

『私が川デビューをしたあの日』

いつのこと？：大学時代

どこの川？：遠賀堀川

幼い頃の私にとって、川というのはそんなに良いイメージのある場所ではなかった。住宅地にある私の自宅の一番近くを流れるのは、緑川というコンクリート三面張りの都市河川である。汚い水がちょろちょろと流れ、雨が降ると増水する。長い間、川ではなく「ドブ」だと思っていた。臭くて汚く、危ないため、遊ぶ場ではなかった。自宅から少し離れたところのある芝川も、私が目にする部分はいだぐ下流であったためか、川幅は広く、茶色く濁った水がゆっくりと流れており、遊ぶ場ではなかった。

川に対するマイナスのイメージが払拭されたのは、小学生くらいの頃だろうか。家族旅行で秩父に行き、そこで初めて上流部の川を目にした時の衝撃は今でも忘れられない。水はきれいで冷たく、河床にはさまざまな形の石があり、魚や水生昆虫もいた。自然の中で遊ぶのが大好きな私にとっては最高の環境だった。体が冷え切るまで夢中になって遊んだ。川って案外いいところだな、と幼心に思ったような覚えがある。

そんな私が、大学で偶然にも川の研究室に入った。大学3年生から2年間『川と人』ゼミに所属し、そこで河川環境工学が専門の先生や川系男子の先輩の下で川について学び、川の素晴らしさをたっぷり教わった。ゼミでの活動は、輪読や先行研究についての勉強、論文作成に止まらない。自分の目で川を見に行くフィールドトリップ、一つの川の源流から河口までを巡るゼミ合宿で幾度となく実際に川を訪れた。さらに、工学系の先輩の調査に同行して川の現地観測を行ったり、河川市民団体についての研究の一環で全国各地の一級水系を巡り、そこで活動する市民団体の方々にヒアリングをしたりもした。このようにさまざまな活動をしてきたが、私がもっとも力を入れたのは遠賀堀川プロジェクトと東彼杵プロジェクトである。これは、ゼミ内有志の学生が集まり、福岡県の遠賀堀川で現在進行中の河川再生活動及び長崎県東彼杵町での川を活かしたまちづくり案の作成にかかわるものである。

前置きが長くなったが、ここでは私が初めて遠賀堀川を訪問した日、すなわち私が川デビューをしたあの日のことを思い出して書いてみたいと思う。

私が川デビューをしたのは、大学2年生の2月である。ゼミ配属より一足先に遠賀堀川プロジェクトの活動にかかわらせてもらうようになって間もないこの日、私は初めて現地調査というものに同行したのだった。初めて訪れる遠い福岡の地で、川についての知識も乏しく、調査で何を見ればいいのかも掴めず、まさに右も左もわからない私はただひたすらに必死で先生と先輩についていった。なぜ必死だったかという、①歩いて調査している最中に雪が降ってきた、②先生も先輩も興味の赴くまま素早く歩き回るため、見失わないように気を付けなければならない、③さまざまな関係者が入れ代わり立ち代わり加わってはすぐに去っていくため、覚えられない、という状況だったからである。初めてにして、2年間のゼミ生活の中で1、2を争う過酷な経験をしたのではないかと思う。確かに過酷ではあったが、今までこんなに真剣に一つの川を隅から隅まで観察することはなかったので、とてもよい経験になった。

もう一点、当時の私にとってよい経験となったのは、さまざまな立場で川にかかわっている方々との出会いであった。川好きの人が集まれば、自己紹介で名前や所属、出身地について話すと「〇〇市かあ。じゃあ、△△川の近く？」というように話が膨らんでいく。川のことになれば話は尽きず、初対面の人同士でも熱い議論が始まる。その様子がとても新鮮であった。本当に川が好きなのだろうということが伝わってきた。早く自分も話についていけるようになりたいと思った。

遠賀堀川という川を見た感想として私が感じたのは、「想像していたよりもきれいだな」ということであつた。私の自宅近くの都市河川に比べたら、水もきれいで様相もちゃんと川に見えるなど思つたのである。住民団体の方々が地道に活動に取り組んできた成果に思いをはせると同時に、再生への希望を持つことができた。そして、ドブ川と言われる状態になつても遠賀堀川を見はなさず、再生させようと懸命に活動する方々の熱意に触れ、ぜひともその活動を応援していきたいと思つた。

私はこの日から卒業するまで遠賀堀川プロジェクトにかかわることになったのである。

以上が、私が川デビューをした日の思い出である。

この時に寒さに凍えたのがトラウマとなり、以来、冬に川に行くと聞くと少々警戒するようにはなつたが、多少のことではへこたれない強さも身に付いたように思う。また、川で生き生きと活動する方々と出会つたことで、それまで知らなかつた川の魅力—すなわち、人と人とがつながる場としての川の機能に気付くことができたことは、私が川というものに惹かれていくきっかけとなつた。

今の私の原点として、この日のことはこれからも忘れることはないだろう。

(次は井坂七星さんにバトンを託します)

